



盲学校が パッシブハウス基準の住居に



盲学校が、質の高い住居に

ハノーファーの元盲学校が、15のアパートと3つの事業所、市の図書館に生まれ変わりました。市の文化財に指定された古い建物でしたが、有志が集まって話し合いながら、パッシブハウス基準にした住居に改造。建築の賞「将来の住居 2012」を受賞するなど、注目を浴びています。

建物は、もともとは1950年代に建てられた盲学校でした。中庭を囲んで、体育館や教室があります。廃校になりましたが、戦後独自のスタイルの建物で文化財に指定されているため、取り壊すことができません。そこで外観を変化させることなく、住居に改造することにしました。有志が集まり、どのようなコンセプトで改造するか2年かけて話し合いがされ「多数決での投票はせず、討論しつくしたうえで合意して決めた」といいます。

住居はすべて持ち家で、住居の大きさは56から176平米とさまざま。体育館だったところは長屋形式3階建ての住居4軒となり、残りは教室を改造しました。例えばクルプツ家の台所は元マット置き場で、居間は体育館、半地下の部屋は更衣室でした。

パッシブハウスの要素を取り入れ、南や西に大きな窓を備え、壁や天井に断熱工事を施し、窓を3重ガラスにしました。文化財の規制があるためパッシブハウスの基準をすべて満たすことはできませんが、かなり省エネなつくりです。住居の購入費は土地を含めて1平米あたり2600ユーロ（1ユーロ130円で、約34万円）でした。例えば一番小さい56平米の住居は14万5600ユーロ（約1900万円）。湯と暖房のためのガス代は1年間で438ユーロ（約5万7000円）と、通常の3分の1程度でした。空気交換器で熱を逃がさないようにしているので、暖房の必要がほとんどないのです。自分の専用の地下室が別途あり、半地下の共同スペースや庭も使う権利がある。市内まで路面電車で二駅で、広い庭付きという最高の立地です。

親子連れはもちろん、老若男女さまざまな人がいて、昔ながらの近所付き合いがある生活が営めます。共同スペースは催し会場やアトリエに改装の予定とか。人口減少が進む中、廃校をどのように再利用するかのヒントにもなりそうです。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

ドイツで子育て



明は10月に6歳になりました。小学生になって初めてのお誕生日。ドイツでは誕生日は、大人になってからもお祝いするほど大事なイベントですから、子どもにとってはなおさら。今年は幼稚園の友達、日本人の友達、学校の友達と3回に分けて自宅で誕生日会を開きました。動物園や博物館、遊技場で開いたり、プロの芸人を雇う人も珍しくありません。

うちは自宅でのこぢんまりした会でしたが、3回もみんなからプレゼントをもらい、ケーキのろうそくを吹き消して明は大満足。「ママの誕生日はいつ？そのときぼくの友達も呼んでいい？」と、とても来年まで待てないようです。それにしても手作りのサンドイッチやブズキーニケーキはあまり減らず、ポテトチップが一番人気。まあしょうがないか…